

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

エルマコーヴァ先生のこと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/721

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



エルマコーヴァ先生のこと

岡 本 崇 男

かつて本学のある先生がエルマコーヴァ先生のことを「育ちのいい人」と評されたことがあった。真意を測りかねたので、どういう意味なのかとお尋ねしたところ、「決して人の悪口を言わない人」ということだということであった。確かに、1999年4月に本学に赴任されて、今年の3月に退職されるまでの12年間にエルマコーヴァ先生が他人のことを悪く言うのを聞いたことがない。わたしが育った環境が悪かった所為なのか、大学の教員はあまり人を褒めないような気がする。特に、自分と同等以上だと思っている人に対しては、直接会った時には慇懃な態度を取るのだが、陰ではその人の業績を皮肉まじりに評価したり、私生活を揶揄したりすることが当たり前だといつの頃からか思うようになっていたので、他人の好いところだけを見つけて賞賛する先生がいることを知ったのは新鮮な驚きであった。

エルマコーヴァ先生は学生に対してもやはり長所を評価して、欠点には目をつむるという態度を貫かれた。学生は褒めた方が積極的に授業に参加するようになるというのが先生の持論であり、ご自身はその効果を実感されていたようである。やや遠い記憶を思い起こせば、ロシアでは相手が赤の他人であっても、もしその人がルールを守っていないと判断されれば、面と向かって非難することが珍しくなかった。殊に女性は舌鋒鋭く堂々と他人の非を指摘し、男性たちがうつろな目でその様子を傍観しているのが印象に残った。このような風土で育った子供なら、むしろ家庭や学校では、その子の優れた面をできるだけ高く評価することも意味を持つのかもしれない。しかし、日本の「幸せな」子供たちは、幼稚園に入ってから高校を卒業するまでの間、

ほとんど家庭でも学校でも叱られたことがないのではないと思われる節がある。たまに学生を叱っても、その学生は何の反応も示さずにただキョトンとしてることがある。幼稚園から中学卒業まで学校でも家でも怒鳴られ続けると、叱責を受けている間にどんな態度を取るべきかが自然と身に付くものなのだが、そうした経験とは無縁の人生を彼らは送ってきたに違いない。このようなわけで、「わたしは日本人の学生には欠点や間違いを指摘してあげる方がその学生のためだと思う」とエルマコーヴァ先生に何度か言ってみたのだが、先生が持論を曲げることはなく、むしろ「〇〇さんが以前よりも積極的に授業に参加してくださるようになりました」と成果を報告されることの方が多かった。もしかすると、先生の対処の仕方の方が学生の気質の変化に合っていたのかもしれない。

このように誰に対してもその人の良い点を見つけて、けっして貶さないという態度は、今年三月の教授会で先生が退任の挨拶をされた時、その場に居合わせた教職員全員が先生の丁寧な日本語のスピーチに穏やかな表情で耳を傾け、普段は会議室に通奏低音のように漂っている（現実には低い声だけとは限らない）私語がその時だけは聞こえなかったという奇跡的な事態で報われたような気がする。

エルマコーヴァ先生は、本学を退職後も非常勤講師として本学と大阪大学外国語学部で教鞭を取られており、本来のご専門である日本の古代歌謡の研究、来日以来取り組まれている日露文化交流史の研究を続けておられる。先生にはこれからも健康に留意され、活躍されることを期待して止まない。